

国際交流活動における学生の学び -2018年度カンボジア・スタディツアー報告-

真壁 五月¹⁾*・山内 圭¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部

(2019年11月20日受理)

新見公立大学では、「国内外での交流体験をとおして、さまざまな国の文化や歴史、医療状況などを学び、多様な価値観への柔軟な思考を養うこと」を目的とし、看護学科基礎分野の選択科目に「国際交流活動」をおいている(2019年度から3学科共通科目へ移行)。2019年1月に国際交流活動のひとつとして5日間(移動日2日)のカンボジア・スタディツアーを実施した。学生が記載した研修中の日誌および研修後のレポートから、本研修での学生の学びを概観した。学生はカンボジアでの病院見学・小学校訪問などを通して、医療や国の制度などについて日本との違いを実感し「これまで当たり前だと思っていたことが当たり前のことではないとわかった」「もっと世界で起こっていることを知っていこうと思う」など、新しい価値観を獲得していた。

(キーワード) 国際交流、看護学生、カンボジア、異文化理解

はじめに

経済など様々な分野のグローバル化に伴い、日本における在留外国人は約273万人(2018年12月)¹⁾、2018年の外国人入国者数は約3010万人(前年比約267万人増加)で過去最高、同年日本人出国者数は約1895万人(前年比約106万人増加)で過去最高となっており²⁾、日本国内で医療・看護を必要とする外国人、ならびに海外で医療・看護を必要とする日本人が増加していると考えられる。また、日本は経済連携協定(Economic Partnership Agreement: EPA)を締結し、2008年から外国人看護師候補者の受け入れを開始している³⁾。厚生労働省によると看護師国家試験に合格した外国人は2009年から2019年の11年間で413人となり⁴⁾日本国内で外国人看護師が活躍する時代を迎えている。一方で、開発途上国に対する国際協力のため、様々な機関を通じて日本人看護職の活動が求められている⁵⁾。文部科学省(2017年)の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」報告でも、「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の学修目標の中に、国際社会・多様な文化における看護職の役割について学ぶことが明記された⁶⁾。現在多くの看護系大学で国際看護に関する授業が行われており、既にベトナムなどの開発途上国で国際看護学実習を実施している看護基礎教育機関もある⁷⁾。

新見公立大学では、「国内外での交流体験をとおして、さまざまな国の文化や歴史、医療状況などを学び、多様な価値観への柔軟な思考を養うこと」を目的とし、看護学科基礎分野の選択科目に「国際交流活動」をおいている(2019

年度から3学科共通科目へ移行)。毎年カンボジア・スタディツアーを実施し、国際的な看護職の活動や役割について学びグローバルな視野を養うという学びを得ている⁸⁾。2019年1月に国際交流活動のひとつとして5日間(移動2日間)のカンボジア・スタディツアーを実施した。学生が記載した研修中の日誌および研修後のレポートから、本研修での学生の学びを概観し、今後のカンボジア研修実施の際の参考資料とするため報告する。

カンボジア⁹⁾について

1. 国の概要

カンボジア王国(Kingdom of Cambodia, 首都: プノンペン)は、インドシナ半島の南西に位置し、タイ、ラオス、ベトナムに国境を接する立憲君主制の国であり、国土面積18.1万km²(日本の約2分の1弱)、人口約1630万人(2018年IMF推定値)、人口の90%がカンボジア人(クメール人)でカンボジア語を言語とし、仏教(一部少数民族はイスラム教)を宗教とする国である⁹⁾。

9~13世紀のアンコール王朝期にはインドシナ半島の大半を統治し、アンコール遺跡に代表される石造建築を誇ったが、14世紀以降、隣国から侵入されて国力は衰え、19世紀末にフランス保護領となった⁹⁾。1945年3月に日本軍がフランスの武装解除を行い、1953年にカンボジア王国(シハヌーク国王)として独立したが、1970年のクーデター・親米クメール共和国の樹立の後に内戦が始まり、1975~1979年の親中クメール・ルージュ政権・民主カンボジア(ポ

*連絡先: 真壁五月 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

ル・ポト政権)時代に、100万人とも200万人とも言われる国民(当時の人口は500~600万人)が処刑と飢餓により死亡した⁹⁾。1990年代に入り、冷戦構造の崩壊もあって和平への機運が高まり、1991年に和平協定に署名し、1993年の総選挙を経て同年に新生カンボジア王国が誕生した⁹⁾。

2. カンボジアの現在の健康水準および社会保障について

カンボジア国民の2015年の平均寿命は68.7歳¹⁰⁾、5歳以下の乳幼児死亡率は1000人あたり31人(2016年、同日本3人)¹¹⁾、妊産婦死亡率10万人あたり161人(2015年、同日本5人)¹²⁾である。カンボジアには、カンボジア社会保障基金(Cambodia's National Social Security Fund: NSSF)があり、その費用は雇用者と労働者が折半する形で納められる¹⁰⁾。対象となる貧困層住民が任意加入することにより、カンボジアの公的病院で無料医療を受けられる制度である¹⁰⁾。しかしこの制度は労働者のみを対象とした、労働中の事故や災害に由来する医療費を負担するものであり、包括的な国民皆保険制度は整備されておらず、医療費は基本的には自己負担となっている¹⁰⁾。

1. 国際交流活動の授業概要

1. 授業の位置づけと授業目的

国際交流活動は、本学健康科学部看護学科の基礎分野の選択科目として位置づけられている。授業目的は「国内外での交流体験をとおして、さまざまな国の文化や歴史、医療状況などを学び、多様な価値観への柔軟な思考を養う」ことである。

2. 到達目標

国際交流活動の到達目標は、「国際体験をとおして、外国文化に触れ、自分および自国文化を見つめなおすこと」である。

3. 授業の概要

開講時期は1年次から4年次の通年単位、単位数は1単位30時間、授業形態は演習である。単位の修得方法としては、①大学で企画している海外研修への参加、②学内・地域(国内)での国際交流活動への参加、③海外体験への自主的な参加(調査研究活動またはAMDAスタディツアー等への参加)の3つがあり、いずれか1つを選択することとしている。カンボジア・スタディツアーはこれらのうち、①大学で企画する海外研修のひとつであり、その他にオーストラリア研修が企画されている。

カンボジア・スタディツアーのめざすところは、スタディツアーをとおして開発途上国の生活や人々の暮らし、健康上の問題などを学ぶこと、海外体験だけでなく、地域の国際親善活動や留学生との交流など、国内での交流体験も活動の対象とし、さまざまな国際交流活動をとおしてグローバルな視野を養うことである。

II. カンボジア・スタディツアーまでの事前研修

カンボジアについてより良く理解することを目的とし、カンボジア訪問前の2018年6月から12月の間に全6回の事前研修を開催した(表1)。この研修を「カンボジア会」と称し、カンボジア・スタディツアー参加希望の看護学科学生だけでなく、新見公立短期大学幼児教育学科ならびに地

表1. カンボジア会のテーマおよび参加者数

	開催日時 2018年	テーマ・内容	参加者数(人)		
			1年生	2年生	合計
第1回	6月29日(金) 18:00~19:00	「2017年度カンボジア・スタディツアーに参加した学生による発表」	6	1	7
第2回	7月27日(金) 18:00~19:30	「カンボジア・スタディツアーの日程等説明会」	10	0	10
第3回	10月26日(金) 17:00~19:20	「カンボジアの歴史を知る」 映画『キリング・フィールド (The Killing Fields)』 ¹³⁾ を鑑賞	7	1	8
第4回	11月2日(金) 18:00~19:30	「カンボジア国民の生活を知る」 日本人による、日本語学校・地雷撤去・辺境での看護活動についてのDVD視聴	9	0	9
第5回	11月30日(金) 18:00~19:30	「2018年度カンボジア・スタディツアー説明会」 スタディツアーについての最終説明会	10	1	11
第6回	12月7日(金) 18:00~19:00	「カンボジア・スタディツアーの準備」 小学校訪問時の交流方法の検討等	9	1	10
合計(参加者は全員、看護学科学生であった)			51	4	55

域福祉学科の全学生に公開し希望者を対象に開催した。第2回カンボジア会の後、スタディツアーに対する学修ニーズを把握することを目的とし、カンボジア会で何を学びたいか学生にアンケート調査を行い、その結果を第3回以降の勉強会に反映させた。

1. 第1回カンボジア会

2018年6月29日（金）18:00～19:00に、「2017年度カンボジア・スタディツアーに参加した学生による発表」のテーマで開催した。前年度に同ツアーに参加した学生5人に依頼し、ツアー中に学生たち自身が撮影した写真を映写しながら具体的な体験やその中で学び、感じたことなど、自由に伝えてもらった。参加者は看護学科1年生6人、2年生1人の計7人であった。

2. 第2回カンボジア会

2018年7月27日（金）18:00～19:30に、カンボジア・スタディツアーの日程等説明会を開催した。日程・訪問先の説明の他、カンボジアの歴史と国民の現在の医療・生活状況、訪問時の注意点などについて、ツアー会社の担当者に説明を依頼した。この時、学生および学生の保護者に研修内容を理解してもらえよう、スタディツアーに関するパンフレット・書類一式を学生に配布した。参加者は看護学科1年生10人であった。この会に参加できなかった学生に対しても後日、スタディツアーに興味のある学生全員に資料を配布した。

3. カンボジア会で学びたいことについての調査の実施

学生のカンボジア・スタディツアーに対する学修ニーズを把握することを目的とし、2018年8月24日に学内メールを用いてアンケート調査を行った。対象は第1回、第2回カンボジア会に参加した学生12人、質問内容は、第3回以降のカンボジア会で学びたいこと、知りたいことは何かについてである。その結果、3人から回答が得られ、学生が知りたいこととして、①カンボジアの歴史、②カンボジア独特の文化、③保健・医療・福祉分野の制度や取り組みの状況、④日本との違いについて、⑤簡単なクメール語の修得、⑥カンボジアの治安について、が挙げられた。

学生からの回答をもとに、第4回、第5回のカンボジア会を企画した。また、カンボジアからの留学生に講演を依頼し一旦は了承を得たが、日程調整が困難であったため、2018年度はカンボジアからの留学生を講師としたカンボジア会の企画を断念した。

4. 第3回カンボジア会

2018年10月26日（金）17:00～19:20に、「カンボジアの歴史を知る」ことをテーマに映画鑑賞を行った。スタディツアーの訪問先にキリングフィールドが挙がっていたため、映

画『キリング・フィールド（*The Killing Fields*）』¹³⁾を鑑賞した。参加者は看護学科1年生7人、2年生1人の計8人であった。

5. 第4回カンボジア会

2018年11月2日（金）18:00～19:30に、「カンボジア国民の生活を知る」をテーマに、「カンボジアの子どもたちを対象とした日本語学校の現状」「地雷撤去に取り組む日本人技術者の活動」「辺境での日本人看護師の活動：HIV患者への支援活動」に関するDVDを視聴した。参加者は看護学科1年生9人であった。

6. 第5回カンボジア会

2018年11月30日（金）18:00～19:30に、「2018年度カンボジア・スタディツアー説明会」として、ツアー会社の担当者を講師として招き、スタディツアーの日程および渡航にあたっての注意点について、スタディツアー直前の説明会を行った。参加者は看護学科1年生10人、2年生1名の計11人であった。

7. 第6回カンボジア会

2018年12月7日（金）18:00～19:00に、「カンボジア・スタディツアーの準備」をテーマに開催した。まずは小学校訪問時のレクレーション、交流方法について学生全員で意見交換した。最終的に日本の小学校の年間行事について紹介することが決まり、入学式、運動会、学習発表会、遠足、卒業式など学生自身の小学生時代の写真を集め、引率する英語科目担当教員の指導のもと英語でプレゼンテーションを行うこととなった。また、風船や日本伝統文化である折り紙も持参することとした。参加者は看護学科1年生9人、2年生1名の計10人であった。

III. カンボジア・スタディツアーの実施と学生の学び

1. スタディツアーの実施

1) スタディツアー実施期間：2019年1月6日（日）～1月10日（木）の5日間（うち移動日2日）。

2) 参加者：看護学科1年生11人、2年生1人の学生12人、および引率教員2人。

3) スタディツアーの日程および内容の詳細は表2に示す。

2. 倫理的配慮

学生の学びについては、スタディツアー中の毎日の学修記録、およびスタディツアー後のレポートから該当箇所を抜粋して引用した。学修記録・レポートを提出していた4名の学生に、その使用目的、協力は自由意思に基づくもので拒否する権利があること、事業評価報告書として発表する旨を学内メールを用いて説明し全員から同意を得た。

表2. 2018年度カンボジア・スタディツアー日程および研修内容

日次	月日曜	時間	発着滞在地	研修内容
1日目	2019年 1月6日 (日)	8:10 10:30 14:15 16:20 17:30 夕刻	関西空港 関西空港発 ホチミン着 ホチミン発 シェムリアップ着	関西空港4F国際線出発ロビー集合 空路、ベトナムへ 乗り継ぎ 空路、カンボジアへ 入国手続きの後、ホテルへ ホテルにて夕食とブリーフィング (シェムリアップ 泊)
2日目	1月7日 (月)	早朝 午前 午後	シェムリアップ	アンコールワットサンライズツアー アンコールワット見学 ホテルにて朝食 アンコール・トム、タ・プロム見学 レストランにて昼食 キリングフィールド見学 オールドマーケット散策 アプサラダンスを鑑賞しながらの夕食 (シェムリアップ 泊)
3日目	1月8日 (火)	午前 午後	シェムリアップ	アンコール小児病院・ビジターセンター訪問 フンセン小学校(街中の小学校訪問) レストランで昼食 NPO法人HERO訪問 (小学校の健康診断の見学とお手伝いなど) スーパーマーケットへ 影絵ショー観賞付き夕食後、 ナイトマーケット散策 (シェムリアップ 泊)
4日目	1月9日 (水)	午前 21:35 22:50	シェムリアップ シェムリアップ発 ホチミン着	SUSU工房訪問 (女性が働く工房と農村の暮らし見学) レストランで昼食 コクチャン小学校(田舎の小学校) トンレサップ湖見学(船で遊覧)⇒中止 ホテルにて休憩後、チェックアウト レストランにて夕食 空港へ 空路ホチミンへ 到着後、乗り継ぎ
5日目	1月10日 (木)	0:15 7:00	ホチミン発 関西空港着	空路、帰国の途へ 着後、入国手続きの後、開散 (機内泊)

3. スタディツアーの主な内容と学生の学び

1) アンコール小児病院・ビジターセンター見学

アンコール小児病院は、1999年にフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーがシェムリアップ市に設立した、24時間態勢の救急病院であり、毎日400人以上、多い日には600人を超える子どもたちが外来を訪れている¹⁴⁾。カンボジアで

は呼吸器感染症や胃腸炎など、先進国では根絶している病気で命を失うことが決して稀ではなく、1999年に開院して以来、延べ160万人以上の子どもたちに無償で医療を提供してきた¹⁴⁾。また、医療教育センターを併設し、スタッフや医療従事者の育成、地域医療支援・保健教育プログラムを通じた地域の人々への一般衛生教育・予防医学の普及に努めている¹⁴⁾。外国人医療スタッフにより診療が開始さ

れたが、2013年1月、開院当初からの目標であった、「カンボジア人によるカンボジア人のための病院」となることが実現し、現在はカンボジア人の力で子どもたちの健康を守り続けている¹⁴⁾。

<学生の学び①>カンボジアには十分に医療を受けることができない人が多くいることや、それを改善するために世界中の人々の支えがあることがわかった。日本では救急車は呼べばすぐに来る。しかし、カンボジアの人たちは何時間も何日もかけて病院まで歩いてやって来ると知った。日本のように医療制度を整えること、みんなが平等に医療を受けられるような仕組みを作ることが国の課題だと思った。看護師として日本国内だけでなく開発途上の国々でもスキルを活かすことができるとわかり、将来を考えるうえでとても貴重な時間を過ごすことができた。

<学生の学び②>この病院では無料で医療を提供されていると聞いて驚いた。しかし治療を受けるために何日もかけて遠くから歩いて来ると知り、日本のように体調不良時にすぐに医療を受けられるということは当たり前ではないのだなと思った。ここではカンボジアの人々が中心となって運営できることを目標にボランティア活動がなされていると知った。ただ支援するだけではなく、現地の未来を考えて活動をするということが本当に大切なのだということがよくわかった。

2) フンセン小学校訪問(街中の小学校)

フンセン小学校はシェムリアップ市の街中にある、校庭をもつ鉄筋コンクリート3階建ての小学校である。訪問時、校長からカンボジアの小学校について、またフンセン小学校に通う子どもたちについて次のような説明を受けた。カンボジアでは、子どもの人数に対してまだまだ学校の数や教員数が不足しているため、フンセン小学校でも授業は午前・午後の二部制となっており、子どもたちが授業を受けられるのは半日のみである。農山村部では、学校が遠い、農業など家業の手伝い、弟妹の世話など、様々な理由によって途中で学校をやめてしまう子どもたちも多く、都市部と農山村部との教育環境の格差が国の問題となっている。しかし一方で、制服を着て一見裕福に見えるフンセン小学校の子どもたちも、多くは授業のない半日は家の仕事や金属を集める仕事などをして家計を支えており、制服も互いに譲り合って使い続けていることも多く、決して恵まれた子どもたちばかりではないことが語られた。日本では当たり前となっている初等教育さえ行き届かない現状があることを、学生は真剣な表情で聴いていた。

その後、校長の案内で学生は2人ずつペアを組みそれぞれ別々の教室で子どもたちと交流を行った。最初は英語で話しかけていたが通じないことが多く、英語・日本語を交えて、表情や身振り・手振りでのコミュニケーションとなった。学生全員による写真を使った日本の小学校行事紹介はできなかったが、準備した写真を携帯電話の画面で見せ

て日本の小学校を紹介したり、日本から持参した折り紙、シャボン玉などを用いて楽しく交流することができた。

<学生の学び③>最初は英語も通じないし本当にどうしてよいかわからなかった。しかし、日本の写真を見せたりすることでだんだんと子どもたちが慕ってくれていることがわかり、感無量だった。言葉がまったく通じなくても、コミュニケーションをとる上では表情が重要なツールだと実感することができた。

<学生の学び④>言葉が通じなくても距離が縮まることを体験できた。コミュニケーションの手段はさまざままで、この気づきは今後看護を行ううえで役立つと感じた。

3) NPO法人HEROの健康診断の手伝い

NPO法人HEROは2011年2月に設立された。世界各国で経済的・社会的な理由により学校に通えない子どもたちのために無料で通える学校を作り、各国の現実に応じた学ぶ機会を子どもたちに提供している¹⁵⁾。カンボジアに建設している学校も子どもたちが無料で通えるカンボジアの公立の学校であり、教員学校を卒業したカンボジア人の教師が働き、学校の運営費や教員の人件費はカンボジアの政府が賄っている¹⁵⁾。

今回学生が体験したのは、NPO法人HEROが運営する事業のひとつであるHotel Doctors Serviceでの子どもの健康診断のお手伝いである。Hotel Doctors Serviceでは、病院へのアクセスが難しいカンボジアの農村部の学校を月に1回訪問し、無料で子どもの健康診断、必要時には投薬、食事や歯磨きなどの生活指導を行っている。カンボジア人医師と現地で働く日本人看護師とともに、シェムリアップからバスで1時間ほどの距離にある農村部の小学校を訪ねた。この小学校はNPO法人HEROが設立した学校であり、教室2つの木造1階建てであった。

学生たちは、最初に日本人看護師から丁寧な説明を受け、体温測定、身長・体重測定などを手伝った。言葉でのコミュニケーションは難しく、4~5歳の小さな子どもたちもいたが、学生たちは互いに協力し合い、子どもたち全員が健康診断を受けられるよう工夫していた。

<学生の学び⑤>田舎の小学校は都会の小学校に比べて生徒の人数がとても少なかった。校庭はとても広かったが、遊具は少しだけだった。子供たちはとても人懐こく、元気で走り回っていた。NPOの方から歯磨きをする習慣がないため虫歯の多い子どもがたくさんいると聞いて驚いた。

<学生の学び⑥>カンボジアの人はみんな優しく温かかった。ガイドさんも行く先々でいろいろな人と話していた。また、感謝の気持ちをたくさん伝えているイメージをもった。健康診断で診察の終わった子どもたちに水や文房具を渡そうとすると、必ず手を合わせて感謝の気持ちを表した後で受け取っていた。感謝を伝える大切さを改めて学ぶことができた。

<学生の学び⑦>私は体温測定のお手伝いをした。カンボジアの子どもたちは腕がとても細く、体温が37℃台の子どもが多かった。医師による問診では、一日に歯を磨く回数を尋ねる項目があった。日本では歯を磨くことは日常生活の一部であるが、カンボジアでは親も歯を磨くことをきちんとわかっていない家庭もあるのだと教えてもらった。健康に関して日本がどれほど環境が整っているのか身に染みて感じる事ができた。医師の診察時には必要に応じて薬が処方されていた。最も多く処方されていたのは抗ヒスタミン剤で、家の清潔状態に問題があるために鼻水が出ている子どもが多いのだそうだ。また、日本では見かけることがないような寄生虫に対する薬を処方される子どももいた。

<学生の学び⑧>私はこれまで、毎日勉強ができたり、しっかり食事が摂れたり、歯磨きができたり、必要な時にすぐに医療が受けられたりすることを当たり前だと思っていた。しかしカンボジア研修に参加することで、それらは当たり前のことではないと学んだ。

4) SUSU工房

SUSUは貧困家庭の幼い子どもたちが強制的に売られてしまう問題を解決するために、2002年、認定NPO法人「かものはしプロジェクト」により立ち上げられたコミュニティファクトリーである（“SUSU”とは、日本語で「頑張って！」を意味するカンボジア語）¹⁶⁾。SUSU工房はシェムリアップから約35km離れた山村にあり、小学校を途中でやめて仕事に就き、家族を支えるなど経済的に困難な背景をもつ約65人の女性が働いている¹⁶⁾。

かものはしプロジェクトが始動した当時、農村の貧しい家庭に生まれた子どもの多くは義務教育である小学校を中退し、日雇いの仕事などで家計を支えなければならず、中には人身売買の犠牲になってしまう子どももいた¹⁶⁾。このような子どもたちの命を守るため、かものはしプロジェクトは大きく二つの支援に取り組んできた¹⁶⁾。一つは「子どもを買わせない」活動で、政府やNGOなどと連携しながら、警察官の訓練や犯罪防止のための啓発活動、人身売買の取り締まりの強化を行った¹⁶⁾。もう一つは「子どもを売らせない」活動¹⁶⁾である。大人が安定した収入を得て、家庭の貧困を解消できれば、子どもは危険な仕事に巻き込まれることなく学校に通うことができると考え、女性が安心して働くことができるコミュニティファクトリー経営を開始した¹⁶⁾。これがイグサなどを使った雑貨や洋服などを創るSUSU工房である。

これらの活動により子どもをめぐる問題が解決してきた一方で、次に取り組むべき課題として「女性の自立」が見えてきた¹⁶⁾。工房で働く女性たちに、読み書きや計算、貯金などの「生きる力」を身につけてもらうことで、経済的・精神的に自立し、工房以外でも安全に働く機会を持っても

られるよう支援し、工房以外の仕事の斡旋や、工房を卒業した後のサポートを続けることで女性たちが安全に持続的に働けることをめざして活動を続けてきた¹⁷⁾。女性たちが働きやすい職場となるよう、職場内には託児所を設け、給食の提供、送迎も行われている¹⁷⁾。その結果、カンボジア事業は自立、2018年3月末をもって「かものはしプロジェクト」は活動を終了した（2018年4月からNPO法人SUSUとして活動継続）¹⁷⁾。

<学生の学び⑨>SUSU工房で働く日本人の方が言っていた、「頑張れる」は環境が与えてくれる“技術”という言葉がとても印象に残っている。カンボジアでは家計を支えるために教育を受けることができずに働いている女性がたくさんいると知った。周りに支えてくれる人や応援してくれる人がいて、今、夢に向かって頑張ることができている私はとても幸せな環境で生きているのだなと思った。「頑張る」ということができる今の環境に感謝しないといけないと思った。

<学生の学び⑩>SUSU工房は女性に安心して働ける場を提供するために設立された工場である。私は「外国の製品は安いあまり品質は良くない」という印象をもっていた。しかしSUSU工房では一つひとつ手作業で丁寧に作っており、最後はベテランの人が細部までチェックしていた。良いものを作ろうという気持ちがとても伝わってきた。工場の説明を聞く中で「頑張れる」は環境が与えてくれる“技術”という言葉がとても印象深かった。

5) キリングフィールド

1970年代、カンボジアではポル・ポト政権下で、100万とも200万ともいわれる自国民の虐殺が行われた¹⁸⁾。ポル・ポトを中心とした勢力は、クメール・ルージュと呼ばれ、純粋な共産主義をめざしプノンペン市民の農村への強制移住、宗教活動の禁止、文化活動の禁止といった政策を強行、反政府勢力とみなされた人々や、教師・医師等の知識人が次々と粛正された¹⁹⁾。その後、粛正を免れた反政府勢力もベトナムの後押しを受けながら反撃を開始、シハヌークを中心とする勢力も台頭し激しい内戦となった¹⁹⁾。国土には多くの地雷が埋め込まれ、数多くの難民を産み出した¹⁹⁾。地雷の多くは現在も埋め込まれたままで、犠牲者を出している現状がある。

キリングフィールドとは、ポル・ポト政権下で行われた大量虐殺の刑場跡の俗称であり、カンボジア国内で100か所以上発見されている。

訪問先のシェムリアップのキリングフィールドには、亡くなった国民への追悼の意を込めて1997年にワット・トメイ寺院が、1998年に慰霊塔が建てられており、慰霊塔の近くには、ポル・ポト政権当時の写真とともに、様々な国の言葉で当時の歴史についての説明文が掲示されていた。シェムリアップのキリングフィールドでは、1975年からの

4年間で数万人が殺害され、ポル・ポト派の政権崩壊後に9000近くの遺骨が掘り起こされたとのことである。しかし、現在もクメール・ルージュ裁判が終結していないため遺骨を埋葬することができず、保管されたままとっている。

現地の通訳兼ツアーガイドにより、内戦時・内戦後のガイド自身の体験談を交えながら、上記カンボジアの歴史、内戦、キリングフィールドについての話が語られた。学生たちは真剣に聴き、中には涙を浮かべる者もいた。犠牲者の遺骨の一部は、この地を訪れるすべての人の目に直接ふれるよう、ガラス張りの慰霊塔に安置されており、スタディツアーに参加した学生たちもその姿に合掌し犠牲者の冥福を祈った。

<学生の学び①>キリングフィールド訪問では、日本で事前に映画を見て少し知っていたことから、興味をもって訪問でき説明もわかりやすく感じた。カンボジア内戦に関してはこれまで客観的な意見しか聞いたことがなかったが、現地のガイドさんからカンボジア人として感じている本当の話を初めて聞くことができた。カンボジア内戦に対する意識が今までとは変わったように思う。生々しいものを見ることもあり、これは今でもカンボジアでは重要な問題であることがわかった。

<学生の学び②>キリングフィールドを見学し、大きな衝撃を受けた。世界には今も紛争があることを知っていたし理解もしているつもりだった。しかし実際に資料を見たりガイドの方から話を聞いたりして、日本のことではなく遠くで起こっていることだと思っていた自分が恥ずかしくなった。世界ではいまだに多くの人が虐殺されたりひどい扱いを受けたりしている。そのことを現地の人に聞き、自分がいかに平和という言葉に踊らされていたのがわかった。もっと世界で起こっていることを身近なこととして考えるようになりたいと思うし、学びたいと思った。

6) その他、アンコールワットでの出会い

アンコールワット遺跡には夜明け前に到着した。遺跡は素晴らしいものであったが、アンコールワット遺跡への道沿いで、大人に混じってみやげ物のスカーフを手売りする子どもたちの姿が印象的だった。その中のひとりと現地通訳の方が雑談をする場面があった。14歳の彼女は「私は将来医師になりたい。学費を自分で準備するために数年前から午前中(夜明け前から)アンコールワットで働き、午後は学校に通っている」と言った。預金額を尋ねた通訳の方は「このまま働けば数年後には大学へ進学する学費が準備できる額だ」と驚いていた。その話を聞いていた学生は後に、「日本では学費を両親に工面してもらうことが多く、奨学金制度もある。学生がアルバイトをすることも多いが、あんなに小さな頃から自分の将来を見すえて働くことはない。自分の今の状況がどれだけありがたいか身に染みて

感じた。カンボジアの子どもたちはすごいと思う」と語った。思いもよらない出会いからも学生は自分自身を振り返り、自分より年下のカンボジアの少女に尊敬の念を抱き、さらに自分を律する気持ちを学んでいた。

考察

カンボジア・スタディツアーの目的は、「国内外での交流体験をとおして、さまざまな国の文化や歴史、医療状況などを学び、多様な価値観への柔軟な思考を養うこと」であった。学生たちは、訪問した先々で現地の人々に出会い、その文化や生活にふれることで、日本での自分自身の生活との違いを実感しており、これまでの自分の知識や考え、価値観などを深く考え直す機会となっていた。開発途上国他、外国の歴史や文化、医療、経済、教育などを知ること自体は、インターネットなど通信が発達した現代においては、その国を訪問しなくても可能である。しかし、その国の人々の考え方を理解したり、現地の人々の体験や実際の生活をわが身に引き寄せて考え、感じることは、実際に体験しなければできないと考えられる。さまざまな国の人々を看護する可能性のある学生たちにとって、カンボジア・スタディツアーは多様な価値観を学び柔軟な思考を養うためには非常に有効な学修方法であり、今後も継続が望まれる。

おわりに

今回のカンボジア・スタディツアーでは、3日目の食事が原因と思われる食中毒により、参加者14人中11人が体調不良となり、症状の重い学生3人が1泊入院した。そのため、4日目午前中のSUSU工房見学に参加できたのは学生3名のみで、午後の研修は中止とした。シュメリアップの国際病院に入院した3人の学生は、患者として入院していながら、その病院の看護師の看護活動を看護学生としての視点をもって観察・学修していた。カンボジアの国際病院では日本の救急病院と変わらない治療や看護が受けられることを実体験し、前日に体験した小学校の健診や、貧困から医療を受けられない人もいる現実との差を感じ、カンボジア国民の誰もが国際病院で行われているような医療が受けられるようになることを願っていた。

謝辞

本報告作成にあたり、日々の研修報告・レポートを提供してくださった学生の皆さま、スタディツアーにご協力いただきました多くの関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。

文献

- 1) 政府統計の総合窓口e-Stat：統計で見る日本 在留外国人統計（旧登録外国人統計） / 在留外国人統計. [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20180&month=24101212&tclass1=000001060399>
- 2) 法務省ホームページ：平成30年における外国人入国者数及び日本人出国者数等について（速報値）. [インターネットOn line], [2019.9.21] http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00078.html
- 3) 公益社団国際厚生事業団（JICWELS）：EPA看護・介護受入事業. [インターネットOn line], [2019.9.21] https://jicwels.or.jp/?page_id=14
- 4) 厚生労働省：第108回看護師国家試験における経済連携協定(EPA)に基づく外国人看護師候補者の合格者数と受入施設名を公表します 別添2 経済連携協定(EPA)に基づく外国人看護師候補者の看護師国家試験の結果（過去11年間）. [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000496521.pdf>
- 5) 厚生労働省：開発途上国に対する国際協力について. [インターネットOn line], [2019.9.24] <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/kokusai/asean/index.html>
- 6) 文部科学省:大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～. 平成29年10月. [インターネットOn line], [2019.9.21] http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf
- 7) 須藤恭子, 樋口まち子：国際看護における実習の意義および教育効果の検討. 国際保健医療, 31(4), 333-345, 2016.
- 8) 山下亜矢子：国際交流活動から得た学生の学び－2017年度カンボジア・スタディツアー報告－. 新見公立大学紀要, 39, 199-205, 2018.
- 9) 外務省：カンボジア王国. [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/index.html>
- 10) 経済産業省：平成30年度国際ヘルスケア拠点構築促進事業（国際展開体制整備支援事業）医療国際展開カントリレポート 新興国等のヘルスケア市場環境に関する基本情報 カンボジア編 2019年3月. [インターネットOn line], [2019.9.21] https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/iryuu/downloadfiles/pdf/countryreport_Cambodia.pdf
- 11) ユニセフ世界子供白書2017：表1 基本統計 5歳未満児死亡率. [インターネットOn line], [2019.9.24] <https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/01.pdf>
- 12) ユニセフ世界子供白書2017：表7 女性指標 妊産婦死亡率. [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/07.pdf>
- 13) 『*The Killing Fields*』:Roland Joffy(監督),Bruce Robinson(脚本), David Puttnam(制作). ワーナー・ブラザーズ配給, 1985年製作/イギリス.
- 14) 認定NPO法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN:【カンボジア】アンコール小児病院(AHC) [インターネットOn line], [2019.9.21] <http://www.fwab.jp/activity/ahc>
- 15) NPO法人HERO活動の紹介：NPO法人HEROホームページ [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://npohero.org/>
- 16) soarとは：SARASUSUホームページ, [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://soar-world.com/2017/07/04/susu/>
- 17) 認定NPO法人カモノハシプロジェクトホームページ： [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://www.kamonohashi-project.net/blog/1642/>
- 18) 外務省：わかる！国際情勢. [インターネットOn line], [2019.9.21] <https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol3/index.html>
- 19) DTACカンボジア観光情報局：国のデータ歴史概略. [インターネットOn line], [2019.9.21] <http://www.dtac.jp/asia/cambodia/history.php>